

Title	滋賀県湖南方言における原因・理由の接続助詞について
Author(s)	東, 和枝
Citation	阪大社会言語学研究ノート. 1 P.44-P.52
Issue Date	1999-03
Text Version	publisher
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/23170">https://doi.org/10.18910/23170</a>
DOI	10.18910/23170
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

# 滋賀県湖南方言における原因・理由の接続助詞について

東和枝

【キーワード】原因・理由の接続助詞、近畿方言、滋賀県湖南方言、シ・サカイ(二)・サケ・デ

## 1. はじめに

日本各地の方言において、原因・理由の接続助詞のバリエーションは非常に豊富であり、いくつかの語形が併存している地域も多い。その中には、盛岡方言における「ハンデ」と「ダス」、津軽方言の「ハンデ」と「モンデ・トコロデ」のように共通語の「から」と「ので」の対立にあたる使い分けが報告されているものもある(此島 1966 など)<sup>1)</sup>。しかしながら、ほとんどの地域では併存している各形式の使い分けについて明らかにされていないのが現状である。

本稿は、近畿方言域の東端に位置する滋賀県から、湖南方言における原因・理由の接続助詞の併用について考察する。

## 2. 近畿方言における原因・理由の接続助詞

近畿方言域には、さまざまな原因・理由の接続助詞がみられる。まず初めに有名な近畿方言の「サカイ(二)」がある。「サカイニ」「サカイ」と二のついた形とつかない形とが併存しており、また、「サケ」「ハカイ」など、いろいろな音変化形が認められる。最近では、近畿中央部、特に大阪市から京都市にかけての地域では、若い世代では「サカイ」から「カラ」へと使用語形が変化していることが指摘されている(岸江 1992 など)。

その他の語形としては、「ヨッテ(二)」「シ」「デ」などがある。「ヨッテ(二)」は大坂弁的だとされるが、京都府や滋賀県でも使用が見られると報告されている(楳垣 1962、井之口 1952 など)。「シ」に関しては、京言葉的な助詞で、おとなしい感じの語とされる(楳垣 1962、奥村 1961)。また、岸江(1992)の調査では、「シ」は「サカイ(二)」「ヨッテ(二)」に替わる新方言にあたりと指摘されている。

このようなさまざまな語形の複雑な併存状態の中、その使い分けに関しては、今まであまり明らかにされていない。奥村(1961)では、地域によっては、サカイとデの併用の地域もあり、その対応はサカイとシの併用と同じであること、一般にシとデは地域的対立をなす場合が多いが、シとデが共に使用される地域もあり、サカイ・シ・デが、複雑な並立関係を示す場合があるとされている。また、「サカイ対シの対立関係は、共通語のカラ対ノデの関係にやや似ている。」とも述べられている。しかしながら、共通語の「から」と「ので」の対立関係との照応は確認されていない。

## 3. 当該方言における原因・理由の接続助詞

本稿のフィールドである滋賀県野洲郡は、湖南方言の中でも東端に位置する。当該方言で使用される形式は、共通語形も含めると「ノデ・カラ・シ・サカイニ・サカイ・サケ・デ」である。このうち「ノデ」はかなり改まった場でしか使用されない。「カラ」については、少ないながらも日常的に使用されており、特に若い人たちの間でよく用いられてい

る。今回は「ノデ」「カラ」は共通語形として扱い、考察対象から外す。

調査は、中年層女性 Y（1948 年生まれ）の詳しい内省をもとに、当該方言の原因・理由の接続助詞について記述する。なお、当該方言は筆者の母方言でもある。

まず、前述した文体差についてまとめると次の表 1 のようになる。

表 1 各形式の文体差

上接語	ノデ	カラ	シ	サカニ	サカイ	サケ	デ
丁寧 デス	○	○	○	▽	▽	▽	▽
断定 ヲ	△	○	○	○	○	○	○

<凡例> ○：自然 △：少し不自然だが使用 ▽：聞くことはあるが不使用

本稿では、共通語の「ので」と「から」との対立についての先行研究（永野 1955、今尾 1991）を参考に、当該地域での方言形「シ・サカイニ・サカイ・サケ・デ」について詳しく見ていくことにする。

#### 4. シ・サカイニ・サカイ・サケ・デ

##### 4.1. 接続

「シ・サカイニ・サカイ・サケ・デ」はすべて活用語の終止形に接続する。共通語の「から」と同じである。

・形容詞

(1) このかばんは大きい {シ/サカイニ/サカイ/サケ/デ} 服が入れられる。

・動詞

(2) 雨が降る {シ/サカイニ/サカイ/サケ/デ} 傘をもっていく。

・助動詞

(3) この服まだ着られる {シ/サカイニ/サカイ/サケ/デ} 捨てんとくわ。

(4) この花きれいや {シ/サカイニ/サカイ/サケ/デ} かざところ。

##### 4.2. 上接語との共起関係

永野（1955）では、「ので」と「から」の上接語について、「「ノデ」は、推量や未来の意味のことばにつくことができない」と述べられている。次の例は、永野（1955）より抜粋。

(5) 社長もあさって頃は帰って来るだろう {カラ/\*ノデ}、社長の意見もちよつと

訊いてみることにしよう。

また、今尾（1991）では、モダリティ形式との共起関係という視点でこの問題をとらえ、仁田（1989）のモダリティに関する 2 つの分類「疑似モダリティ形式」「真正モダリティ形式」のうち、「真正モダリティ形式」には「ので」が共起しないと述べている。

ここでとりあげられている上接語は以下のようなものである。

「疑似モダリティ形式」タイ（欲求）

ソウダ、ヨウダ、ラシイ（推量）

ソウダ、トイウ（伝聞）

「真正モダリティ形式」ダロウ、デショウ

マイ

これらのうち、方言で使用しない（あるいはかなり不自然）と思われる「トイウ」「デショウ」「マイ」を省き、それぞれ方言形との共起関係を調べてみる。

<欲求>

(6) 通訳になりたい {シ/サカイニ/サカイ/サケ/デ} 勉強してるねん。

まず、「タイ（欲求）」との共起においては、全ての形式が自然に使用されうる。しかしながら、(6)で「サカイニ・サカイ」を使用した場合「絶対に通訳になりたい、これでないだめだ」という印象を受けるといふ内省があった。つまり、他の語形「シ・サケ・デ」を用いた場合に比べて、勉強している理由が強調されるという若干の意味の違いがあることがわかった。

つづいて、その他のモダリティ形式との共起関係を見ていく。

[疑似モダリティ]

<推量>

(7) 雨が降りそうや {シ/サカイニ/サカイ/サケ/デ} 早めに帰ったほうがええで。

(8) 体が悪くなったようや {シ/サカイニ/サカイ/サケ/デ} 酒やめてんねん。

(9) 隣には来たらしい {シ/サカイニ/サカイ/サケ/デ} うちにも来るんちゃうか。

<伝聞>

(10) 台風が来るそうや {シ/?サカイニ/?サカイ/サケ/デ} 明日はやめとこ。

[真正モダリティ]

(11) みんなそう思うやろ {シ/?サカイニ/?サカイ/サケ/デ} しゃあないんちゃう。

ここで、問題となるのは「サカイ（ニ）」が「ソウダ（伝聞）」や「ヤロ（推量）」との共起関係が不自然になることである。ただし、この不自然さは、他の語形に比べるとやや不自然に感じられるという内省があった程度であり、日を変えて再調査すると「おかしくない」と答えられることもあった。しかし、程度が低いにしろ不自然と答えられることがある理由を考えてみる。

例文(10)は、他の例文に比べると、その理由にあたる部分が何かから伝え聞いたものであり、また、まだ起こっていない出来事でもあるため確実性が低いという特徴がある。永野氏は「から」は、前件と後件が話し手の主観でもって結びつける形式であり、それについては「話し手の主観が充分の責任をもつ」と、「から」の意味あいについて述べている。この例文(10)に「カラ」は使用できるのであるが、「サカイ（ニ）」の性質はこの「から」の性質をさらに強めたものであり、不確定な情報を根拠にする際には使用されにくいと考えられる。例文(11)も、例文(10)と同じく不確実性が高い。やはり、「サカイ（ニ）」は、判断の根拠が弱い場合には、使用されにくいといえるのではないだろうか。

さて、ここで共通語の「から」「ので」との比較をすると、「サカイ（ニ）」は、「ダロウ（推量）」との共起が不自然な点は「ので」と同じ様な性質を持つことになり、また、「ソウダ（伝聞）」との共起が不自然な点で「から」と異なる。つまり、共通語の「から」「ので」と当該方言の「サカイ（ニ）」「シ・サケ・デ」は、その意味あいは似ているが、

全く同じ様な対立を見せているわけではないといえるように思われる。

また、「サカイ」の音変化形である「サケ」は、「サカイ(二)」ほど、理由を強調する意味あいや、不確実な根拠の場合使用が不自然になるという性質を持たない。これは、おそらく、音融合によって音節数が短くなったことにも関係するのではないだろうか。逆にいえば、「サカイ(二)」の持つ音節数の長さが強調といった意味あいをもつ一因となっているように思われる。

上接語の問題として、最後にもう一点、永野氏は「「ので」は、「のだ」や「のです」につけて用いることができない」としている。これについては、方言形は、全形式とも「のだ」の方言形「ンヤ」に続けて用いることができる。

(12) 明日には届くんや {シ/サカイニ/サカイ/サケ/デ} 我慢しとき。

上接語との関係をまとめると表2のようになる。

表2 上接語との共起関係

上接語	ので	から	シ	サカ仁	サカイ	サカ	デ
願望 タイ	○	○	○	○	○	○	○
推量 ソウダ	○	○	○	○	○	○	○
ヨウダ	○	○	○	○	○	○	○
ラシ	○	○	○	○	○	○	○
伝聞 ソウダ	○	○	○	△	△	○	○
推量 タラシ	×	○	○	△	△	○	○
ノダ	×	○	○	○	○	○	○

<凡例> ○: 自然 △: 少し不自然だが起こりうる ×: 不自然

#### 4.3. 後件との共起関係

「ので」「から」の後件については、永野(1955)に「から」は主観的な推量・見解・意志・命令・依頼・質問表現などが後続する場合によく用いられ、「ので」の後件には客観的叙述がくるとされている。

しかしながら、方言の5つの形式はどの文脈でも用いることができる。

[主観的]

<推量(想像・推測)>

(13) あいつのことや {シ/サカイニ/サカイ/サケ/デ} 気づいたかもしれんな。

<見解(意見・主張)>

(14) 明日発つんや {シ/サカイニ/サカイ/サケ/デ} 急いだほうがええ。

<意志(意向・決心)>

(15) 重そうや {シ/サカイニ/サカイ/サケ/デ} わたしが持ったろう。

<命令(禁止)>

(16) ここは危ない {シ/サカイニ/サカイ/サケ/デ} あっち行っとき。

<依頼(懇願・勧誘)>

(17) もう時間や {シ/サカイニ/サカイ/サケ/デ} 起こしてきてくれる。

<質問>

(18) いつも一緒や {シ/サカイニ/サカイ/サケ/デ} さびしくなるんちゃう。

[客観的]

<自然現象・物理的現象などの記述>

(19) 4月になった {シ/サカイニ/サカイ/サケ/デ} 暖かくなってきた。

<社会現象の記述>

(20) 去年は物価が急騰した {シ/サカイニ/サカイ/サケ/デ} 生活が苦しかった。

<生理的現象の描写>

(21) さんざん働いた {シ/サカイニ/サカイ/サケ/デ} お腹がすいてきた。

<心の動き(感情・感覚を含む)の客観描写>

(22) 犬が急にほえへんようになった {シ/サカイニ/サカイ/サケ/デ} なんでもやろと思っただ。

<行動の客観描写>

(23) 夜が明けた {シ/サカイニ/サカイ/サケ/デ} 海岸へ出て空を眺めた。

<事物の様子描写>

(24) 天気恵まれた {シ/サカイニ/サカイ/サケ/デ} 隣の山岳も見ることができた。つまり、どの形式も主観的、客観的文脈ともに使用できるといえ、ここでも共通語の「ので」「から」の対立とは異なる。

#### 4.4. その他の共起関係

今までとりあげた共起関係以外に、永野論文ではいくつかの「から」と「ので」の違いについて触れられている。それは、「ダをつけて、文の述部になるか」「ハ、コソといった係助詞が後接するか」といったものである。今野(1991)では、これらを前件に焦点がおかれる場合の焦点要素として各形式との共起関係を見ている。そこであげられたテストフレームは以下のようなものである。

- ①強意の副助詞「コソ」の付加
- ②強意の終助詞「ヨ」の付加
- ③疑問の終助詞「カ」の付加
- ④疑似分裂文への変形
- ⑤「ダ」による代用省略
- ⑥埋め込み文における主節の省略

それぞれについて確かめていく。

まず、強意の副助詞「コソ」の付加について、共通語では「から」にはあるが「ので」にはないとされている。方言形では次のようになる。

(25) 安い {?シ/サカイニ/サカイ/??サケ/デ} こそよく売れる。

永野論文には、これらは「特に理由を提示して課題の場を設定する」用法とされており、これらの課題の理由に対する結論はその課題を解く人の主観によって決定されるということである。これらを基に考えると、「サカイ(ニ)」と「デ」には、「強く理由を提示する」という機能があるということになるだろう。また、「シ」もその機能がある程度持っているが「サカイ(ニ)」や「デ」に比べると弱く、「サケ」は理由の提示度が非常に弱いといえるだろう。

次に、強意の終助詞「ヨ」の付加について見ていく。終助詞「ヨ」は、聞き手の同意に関係なく話者の判断を強調する」場合に用いられ、話し手の強い主張を表すと今尾はまとめている。また、「から」は「ヨ」と共起するが、「ので」はできないとしている。ここでは、方言の終助詞で共通語の「ヨ」にあたるものとして「(ヤ)ㇿ(低いイントネーション)」を使ってテストしてみる。

(26) 起きるのが遅い {シ/サカイニ/サカイ/サケ/デ} やわ。

どの形式も共起することが確かめられた。

疑問の終助詞「カ」との共起についてみてみよう。今尾論文によれば、これも「から」は共起するが「ので」は共起できないとされている。方言形ではどうだろうか。

(27) こつが分かった {シ/?サカイニ/サカイ/サケ/デ} か、できるようになった。

(28) こつが分かった {シ/サカイニ/サカイ/サケ/デ} か？

(27) のような文は、日常あまり使用しない。また、「サカイニ」は音節数の多さからか少し言いにくいとの内省があったが、(28) のように疑問文で確かめたところ、全形式不自然ではないことがわかった。

次の疑似分裂文への変形とはいわゆる倒置である。今尾氏の例文では次のようである。

(29) a 電車の事故があったから、会議に遅れてしまった。

b 会議に遅れてしまったのは、電車の事故があったからだ。

(30) a 電車の事故があったので、会議に遅れてしまった。

\*b 会議に遅れてしまったのは、電車が遅れたのでだ。

b のような文を「疑似分裂文」とよんでおり、「ので」はこの文が作れない。方言形では、全て可能である。

(31) 会議に遅れたのは、電車が遅れた {シ/サカイニ/サカイ/サケ/デ} や。

また、次の「ダ」による代用省略についても、同じことがいえる。「ダ」による代用省略とは次のようなものである。

(32) 電車の事故があったから (ので) 遅れた。

a 電車の事故があったからだ。(「だ」で「遅れた」を代用)

\*b 電車の事故があったのでだ。

方言形ではすべて可能である。

(33) 電車の事故があった {シ/サカイニ/サカイ/サケ/デ} や。

最後に、埋め込み文における主節の省略について、これも「から」は可能で「ので」は不可能とされているが、方言形は全て可能である。

(34) 御飯がなかった。母は帰るのが遅かった {シ/サカイニ/サカイ/サケ/デ} と言った。

以上の点をまとめると次の表3のようになる。

表3 その他の共起関係

テストフレーム	ので	から	シ	サカニ	サカイ	サケ	デ
①強意の副助詞「コソ」の付加	×	○	△	○	○	▽	○
②強意の終助詞「ヨ」の付加	×	○	○	○	○	○	○
③疑問の終助詞「カ」の付加	×	○	○	○	○	○	○
④疑似分裂文への変形	×	○	○	○	○	○	○
⑤「ダ」による代用省略	×	○	○	○	○	○	○
⑥埋め込み文における主節の省略	×	○	○	○	○	○	○

<凡例> ○:自然 △:少し不自然だが起こりうる ▽:かなり不自然 ×:不自然

#### 4.5. 用法について

その他の用法の問題として、永野氏は「「から」には、「ので」の持っていない終助詞的な用法がある」と述べている。これについては、全ての方言形ともに可能である。

(35) ほな後から行く {シ/サカイニ/サカイ/サケ/デ}。

最後に、理由を並立する場合についてみておこう。南(1974)の従属句の分類によると、共通語の「から」はC類、「ので」はB類であり、C類はB類の従属句の内部要素となることができないといわれている。具体的には次のようになる。

(36) { (お腹がすいたので)、ごはんが食べたいから} 帰る。

\* { (お腹がすいたから)、ごはんが食べたいので} 帰る。

しかし、方言形ではそのような制限がなく、全ての組み合わせが可能である。

#### 5. まとめ

以上、共通語の「から」と「ので」の対立が、そのまま「サカイ」と「シ・デ」の関係にあてはまるのかを中心に、当該方言での原因・理由の接続詞についてみてきた。「サカイニ・サカイ」が他の形式に比べると「判断の根拠となる事態を強く主張する」こと、また「シ・サケ」は「理由の提示度が弱い」といった違いがみられたが、結果として、「から」「ので」の対立とは明確に対応せず、また、方言の形式のなかでもはっきりとした違いはないことが分かった。

さて、そこで、これだけ多くの形式が実際どのように使用されているのか、場面別の談話調査を行ったところ以下のような結果になった。

表4 場面別(「改まった談話」「地域での談話」「家庭での談話」)<sup>2)</sup>

	デ	カ	シ	サカニ	サカイ	サケ	デ
<改まり>	29.5(13)	43.2(19)	25.0(11)	2.8(1)	-	-	-
<地域>	-	25.0(5)	40.0(8)	20.0(4)	-	-	15.0(3)
<家庭>	-	11.1(3)	3.7(1)	7.4(2)	18.5(5)	3.7(1)	55.6(15)

<凡例> 数字は% (実現数)

表5 相手別（「娘との談話」「配偶者との談話」）<sup>3)</sup>

Yの使用状況	デ	カラ	シ	サカイニ	サカイ	サケ	デ
対娘	-	36.7(18)	16.4(9)	4.1(2)	8.2(8)	-	32.7(16)
対配偶者	-	6.9(2)	17.2(5)	10.3(3)	10.3(3)	-	55.2(16)

相手の使用状況	デ	カラ	シ	サカイニ	サカイ	サケ	デ
娘	-	22.2(4)	50.0(9)	-	11.1(2)	-	16.7(4)
配偶者	-	-	22.2(4)	5.6(1)	38.9(7)	5.6(1)	27.8(5)

<凡例> 数字は%（実現数）

表4は場面別の各形式の使用数と使用頻度である。概観すると、「ノデ」は改まった場面でのみ使用される形式であり、ふだんは使用されないことが確認できる。また、改まった場面では「デ」は全く使用されず、「サカイニ」も1例のみである。また、「地域での談話」と「家庭での談話」をくらべると、「家庭」では「シ」の使用が減り、「デ」の使用が増えることがわかる。また、「サケ」の使用も「家庭」のみである。被調査者の内省では「シの方がデよりも上品な感じがする、また、サカイニの方がサケより上品な感じがする」と答えられており、語感によって使い分けられていることがわかる。

また、表5は同じ家族でも、年代が違う相手との談話の結果である。ここから、若年層の「娘」に対しては「カラ」の使用が多く、同じ中年層の「配偶者」に対しては「デ」「サカイ（ニ）」の使用が多いといったように、相手の年代によっても使い分けられていることがわかる。

まとめると、意味の違いよりは、それぞれの形式が持つ語感（おそらく、語の新旧から発生しているものと思われる。）によってさまざまに使い分けられていると言えるのではないだろうか。また、京都や大阪など近畿中部部でおこっている「サカイ（ニ）」から「カラ」への変化が当地にも及んでいることが示唆されるだろう。

こういった言語変化は、おそらく標準語や隣接地域との交流が盛んになって活発化したと考えられる。そういった言語接触が起こる前、固有の方言での使いわけはどうであったのかを知るためには、老年層の調査が不可欠だと考えられる。今後の課題としたい。

【注】

- 『方言文法全国地図』では、青森県から新潟県にかけてあまり明確な使い分けが見られないとされている（小林1992）。
- 場面別調査の概要は、それぞれ次のようである。  
 「改まった談話」先生との電話での談話。  
 「地域での談話」パート先での休憩時間の談話。参加者は女性7名（中年層）。  
 「家庭での談話」家庭での夕食時の談話。参加者は4名。
- 2人で話してもらった。「娘との談話」娘20代。「配偶者との談話」配偶者50代。

【参考文献】

- 井之口有一（1952）『滋賀縣言語の調査と対策』  
今尾ゆき子（1991）「カラ、ノデ、タメーその選択制限をめぐる一」『日本語学』10-12  
楳垣実（1962）『近畿方言の総合的研究』三省堂  
奥村三雄（1961）「2 京都・滋賀・福井」『方言学講座』第3巻  
岸江信介（1992）「近畿方言の動態と分布との関連」『特集 方言地図と文法』『日本語学』11-6 臨時増刊号  
此島正年（1966）『国語助詞の研究』桜楓社  
小林賢次（1992）「原因・理由を表す接続助詞一分布と史的変遷一」『日本語学』11-6 臨時増刊号  
永野賢（1952）「「から」と「ので」とはどう違うか」『國語と國文学』29-2  
仁田義雄（1989）「現代日本語文のモダリティの体系と構造」『日本語のモダリティ』くろしお出版  
南不二男（1974）『現代日本語の構造』大修館書店

---

東和枝（ひがし かずえ）

大阪大学大学院生 lev031hk@ex.ecip.osaka-u.ac.jp